

衿の分類

平 沢 和 子

Classification of the Collars

Kazuko Hirasawa

1. はじめに

衿はそれぞれ固有の形態を持ち、見る人に異なる印象を与え、ある時は保温効果を発揮し、またある時はその美しさ・新しさ故に人を楽しませている。衿に限らず服飾は人の体に沿うことによってその形が生まれ、無限の変化を持つ人の心と体と共に存在し、その複雑さがデザイン活動の理論化を困難にしている。

衿は衣服の構成上顔の近くにあること、比較的機能性を問わないことから、形の変化は衣服デザイン中最も多様で、人の飽くことない創作活動の一端をみる事ができる。これらの衿を認識し実践に移せる知識とするため、書物によって伝えられている衿、日常用いられている衿の形をできるだけ一堂に集め、分類を試みた。

構造上の分類はすでに報告¹⁾されているが、ここではデザインと裁断の関係を明らかにすることを目的とし、衿に共通する構成要素を抽出し、これによって基本構造を組み立て、分類尺度とした。その結果、複雑多岐な衿の形の中に何らかの法則性を見出し、人が創り出した衿の形を系統的に概観することができると考えた。実物や裁断図がない衿の理解、集めた資料の不足、衿の名称についての外国語の解釈の仕方など問題点は多いが、試案としてここに報告する。

2. 衿の定義

「Collar」は、本来円筒状の頸部をとりまく物の総称であり材料を問わず、また身頃との接合は無関係であり、すでに古代エジプトの服装史に見られた最も発達した装身具である。「衿」は江馬²⁾によれば「衣服の端」という意味のうちで頸部・咽喉もとをめぐる衣服の端(縁辺)をさす語とされる。衣服の構成・機能上からみたとりの発生原因として杉本³⁾は、「Collar」や「衿」の表現する内容が比較的漠然としているのに比べ古代中国においてはそれを表現する文字の豊かさをあげ、衿が既にかなり高い段階に発達していたことを指摘している。諸地域で自然発生した衿は西洋の衣服にとり

入れられ、14世紀後半のプールボアンの裁断図⁴⁾には衿があらわれている。その後、洋服の衿は、立体的な裁断の発達と共に次第に複雑・高雅に洗練され、今日に至ったものと考えたい。

分類の対象とする衿について次のように定義した。「別つ裁ちによって作られ、身頃衿つけ線にとりつけられた衣服の部分としての衿をさす。」従って、例えば、High neck collarは頸に沿わせて裁ち出したもので、身頃ネックラインの変化形に属せしめ、Scarf collarは独立した裁断・着装が可能であり、いずれも分類の対象からは除いた。

3. 衿の構成要素

3-1 身頃衿つけ線

衿は身頃と接続して存在するので身頃衿つけ線とは不可分の関係である。身頃の衿つけ線は、身頃・袖・衿が分化しない以前、身頃の発生と共に着脱のためにつくられた「明き」として生まれた。「明き」の形としては、人体にまとった状態で4種をあげることができると報告され⁵⁾、初期の衿の発達段階では「明き」の形によって衿の形が左右し諸地域独特の形をつくったと思われる。

今日の立体構成における原型の衿ぐりは、被服構成学上定めた頸付根線とはほぼ一致し、デザイン上身頃衿つけ線を定める起点であり、密着した衿では着ごちに影響を与える。そこで成人女子における頸付根線について観察した。⁶⁾製図上で衿ぐりを求めるには前後の頸幅・頸丈及び案内値の人体因子が必要であり、成人女子の衿ぐりの個体差は大きく、⁷⁾更に骨格および筋肉による年齢的変化が認められる。

3-2 衿つけ線

衿つけ線とは身頃衿ぐり線の長さに対応する衿における衿つけ部分をさし、初期ではこの長さを満たす衿つけ線は直線であったと思われるが、頸部に密着した衿や形の変化を求めているような曲線の衿つけ線が生

まれた。

頭に沿う立ち衿を構成する場合の製図上の衿つけ線

と人体各部の関係や、折り衿の場合の衿腰の頸部への沿い方と衿つけ線を知る目的で実験を行った。⁸⁾

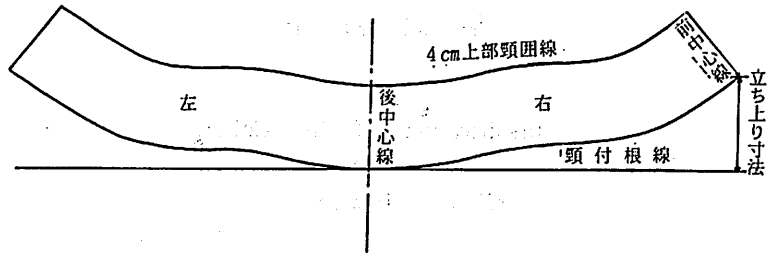


図 1- (1) 頭付根線とその 4 cm 上部の頸圍線によつて囲まれる頸部体表の平面展開図—青年女子—

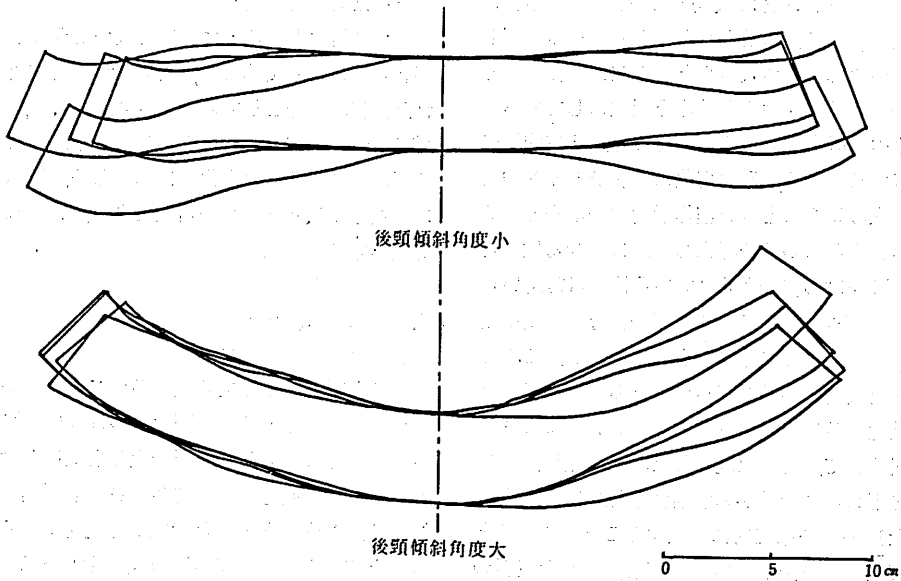


図 1- (2) 頭付根線の平面展開図の個体差と後頭傾斜角度

図 1- (1) は頭付根線とその 4 cm 上部の頸圍線によつて囲まれる頸部体表を採取した青年女子の一例である。個体差や左右差は大きく、図 1- (2) は青年女子の頸部体表の個体差の範囲をあらわし、個体差を知る方法として後頭の傾斜角度が最も体表の特徴を表わした。立ち衿ののぼり代* や折り衿の衿腰がどのように頸部に密着したり、離れたりするかは、着装者の頸部・肩部の形と衿つけ線によつて決まる。このような現象の頸部に密着した衿をプラス角度、頸部から離れた衿をマ

イナス角度と仮称すれば、プラス角度・マイナス角度はどんな衿にも観察され、また意図的に使われている。図 2 は立ち衿を例に表現した衿角度のちがいである。例えば、和服小袖の立ち衿は「抜き衣紋」に着ることによつて後身頃の衿はプラスからマイナスへ、前身頃の衿はプラス角度に変化を与え、背広服上衿に施すくせとりの手法は素材の性質を利用して衿角度をプラスとし、衿腰は頸部にぴったりと沿わせている。図 3 は背広服上衿の製図上の衿つけ線（マイナス角度）と、くせとりの衿つけ線（プラス角度）の変化を示す実験例である。⁹⁾ この織物の剪断変形による後頭部分の衿折り山線の長さの縮小率は 1.0% ~ 9.7% と巾があり、熟練者は頸部の形態によつて加減するという。個

* のぼり代……立ち衿の場合首にそつて立つた部分のことは衿腰あるいは立ちしろといわずのぼり代という。

田中千代服飾事典同文書院

衿の今類

立ち衿の場合

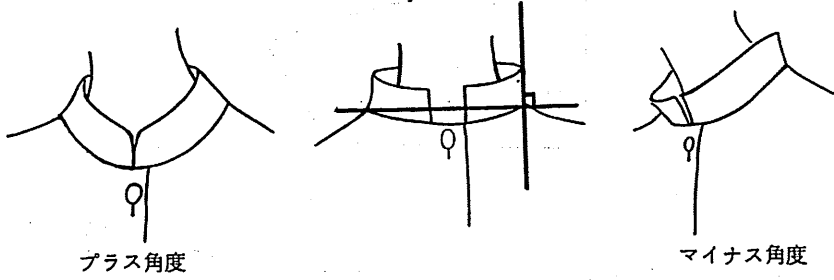


図2 立ち衿ののほり代や折り衿の衿腰が頸部に沿う立ち方

人差の大きい頸部の形態に対応する実際的方法である。これを平面にするためには図3-(2)に示す2枚のピースとなるような立体化が行われており、製図上の衿つけ線は上向きのカーブに変化し、着装時、衿腰はプラス角度となる。この上向きカーブと図1の人体上の頸付根線を照合すれば一層理解できる。さらにくせとりの手法で注目すべきは、衿外まわり線の変化である。背広服上衿の衿外まわり線は背面ではほぼ頸付根線に落ちつくのであるが、図3-(1)の製図上の衿外ま

わり線とは異った曲線の変化と、長さの増加がみられる。この変化は頸部・肩部に沿うためのもので図1-(1)に示した頸部体表を採取した頸付根線とよく一致する。図3にくせとりの手法後の織糸の変化を線で示したが、このようなくせとりを施しにくい素材の場合、2枚のピースに裁断することによって折り衿をプラス角度、マイナス角度とすることができる。図4は折り衿の衿腰を意図的にプラス角度、マイナス角度にした製図例である。

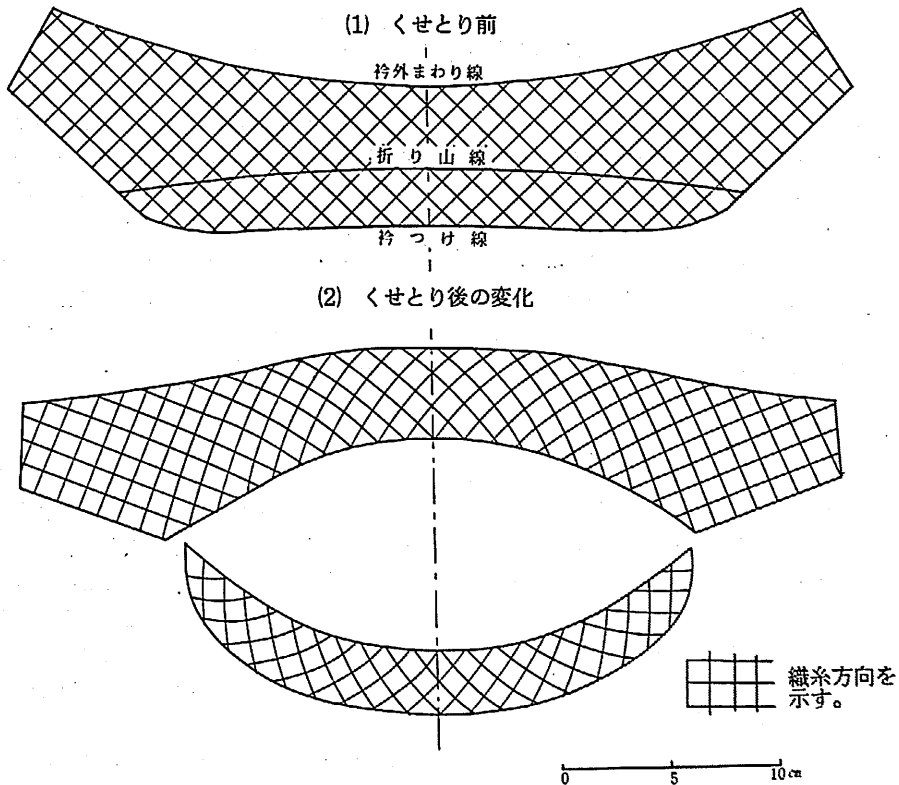


図3 くせとりの手法による背広服上衿の衿つけ線、衿外まわり線の変化

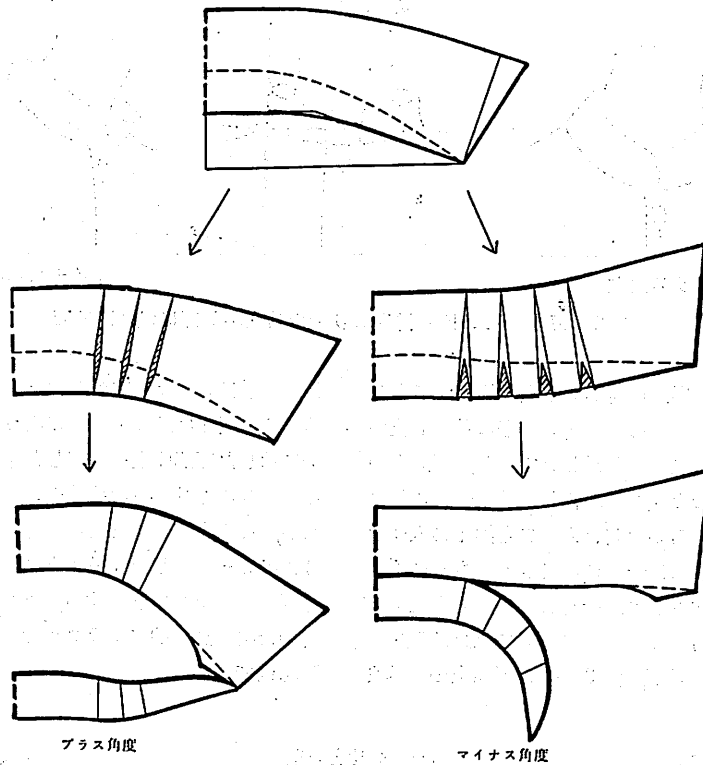


図4 折り衿をプラス角度、マイナス角度にする製図例

3-3 衿幅

身頃衿つけ線に対応して縫い合わせる衿つけ線が衿の長さである。長さに対し幅があれば面が構成され、この2要素で衿が成立する。衿幅は立ち衿においてはのぼり代ともいわれ頸に沿って立つ部分である。折り衿においては、頸に沿って立つ衿腰と折り返る部分を区別せず衿幅とする場合と、衿腰と区別して折り返った部分のみを衿幅とする場合とがある。

衿の自然発生を考えると、着脱のための「明き」のふちどりを衿(縁)とするならば衿幅は少なくてもよく、寒冷・暑熱・砂塵・乾燥を防ぐ目的で発生したならばその衿幅は頸の長さあるいはそれ以上に広がったと推察され、北アジア・中央アジアに見られる衣服の衿幅はそれなりに意味を持つものであろう。衿幅は衿が防寒・防塵の機能性を発揮する要素の1つである。また衿幅は装飾目的にも注目され、和服の僧綱領や洋服のRuffなど頸の長さにさしつかえるほどに増大し、この内部矛盾を含んだ立ち衿は折り衿を誘導した。

3-4 衿腰

衿腰は衿の折り返しによって生まれ、衿が頸に沿って立つ部分である。衿腰の変化は、衿腰の高さによる

変化と頸部に沿う立ち方、すなわち前述のプラス角度・マイナス角度を持って立ち上る変化の2つの要因による。折り衿の場合、衿腰の高さを示す衿折り山線は、衿外廻り線の長さとは着装者の頸部・肩部の形態との関係で決まる。即ち、衿外廻り線と衿つけ線は一つの面の両端であるから、衿つけ線の形状と衿腰は深くかかわる。そこで一つの面の中に存在する衿外廻り線・衿折り山線・衿つけ線にくせとりやダーツを施し、複雑な衿を構成する高度な技術が発達した。

3-5 ラベル

ラベルは前身頃と衿の接合する部分の一部が折り返り、その結果身頃が衿に転じた部分をさす。ラベルが位置する胸部は人体の中では大きな面である上に、縫い目を必要とせずに折り返ることによる装飾的效果は大きい。機能面から考えるとその構造から必然的に前明きであり、頸部、胸部の開口部を自由に開閉できることがあげられ、防暑・防寒の効果を併せ持つことができる。

中国の俑や古代ペルシアの衣服に広い衿幅のラベルをみることができるが、これについて杉本³⁾は、「上衣を折り返して領としたということは、毛皮や皮革を

衿 の 分 類

材料とした胡服では上衣の首まわりの部分を折り返してえりを表現したことを意味している。このことは古代ペルシアの宮廷服などにもみられることで(中略)いずれにしても上衣の衣端を折り返したえりの表現は中国固有のものではない。」としている。

4. 衿 の 種 類

衿の種類とは衿の構造の相違をさし、その構造のち

表 1 衿の種類と構成要素の関係

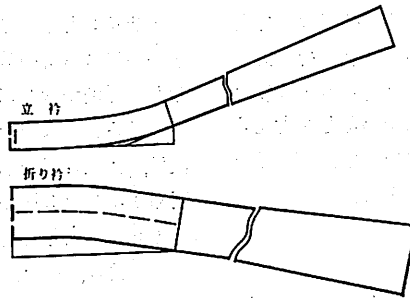
構 成 要 素	衿の種類と構成要素の関係		
1 身頃衿つけ線	} 立ち衿	} 折り衿	} 開き衿
2 衿つけ線			
3 衿幅			
4 衿腰			
5 ラベル			

が異なる衿の種類は、立ち衿・折り衿・開き衿である。分析した構成要素と衿の種類の関係は表1にまとめた。設定した三種の衿は単純な構造で最も多くの衿の形を矛盾なく説明し得るものと考えた。

5. 衿 の 分 類

分類尺度は構成要素を抽出し、これによって構造のちがいを明らかにした三種の衿である。今までに作り出され、命名された衿の名称は日本語と英語に限った。Tie C., Bowed C. はその構成方法によって立ち衿または折り衿に, Shawl C., Sailor C., Tuxed C. は折り衿とも開き衿ともすることができる。外観は似ていても裁断(縫い目)のちがいで両者の構造を区別することができる。図5にTie C. とSailor C.とを例にとり、両者のちがいを製図で明らかにし、分類にあたっては一般に多く用いられる製作方法に従った。

Tie Collar の場合



Sailor Collar の場合

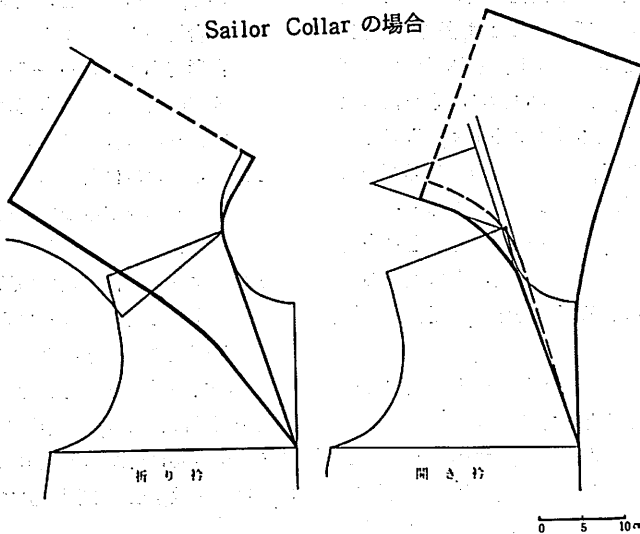


図 5 裁断方法によって異なる衿の構造例

衿の名称のうち3種のどれにも分類することのできないものに台衿つきシャツカラーがあるが、これは立ち衿と折り衿の複合形である。

立ち衿・折り衿・開き衿とその複合形として分類した衿のグループについて、更にその特徴から構成要素別変化形に分類することを試みた。もとより衿のデザイン結果は唯一の構成要素の変化にとどまるものではないが、衿を理解する手段として最も特徴ある変化をもとに分類した。これらの結果が表2である。衿の種類別は実線で表わし、構成要素別変化形は破線で区切った。

従来の衿の命名の仕方は一定の根拠又は法則によるものではないので、通常用いられている実在の名称を用いて構造上の分類をすることには問題が残る。その上、ひとつひとつ名称が与えられない多くの衿が発表され、創られている。そこで無数のバリエーションを包括するため、デザイン画¹⁰⁾を用いて代表的な衿の種類とその複合形、更に構成要素別変化を表3に表わした。

開き衿は表1に示した5つの構成要素を持つ衿である。5要素のうちラベルを除く4要素は立ち衿・折り衿の構成要素でもあり、上衿の変化は立ち衿・折り衿・立ち衿と折り衿の複合形・さらに上衿なしが考えられる。これは名称が与えられていないので、デザイン画によって表3の上衿の変化として示した。

6. 考 察

6-1 立ち衿・折り衿・開き衿のそれぞれの祖形には、衿が育つ環境条件にあり文化の高い東洋ですでに長い歴史を持って発達していたことは、多くの遺物¹⁰⁾によって知ることができる。しかし、立体構成の初期にとどまった東洋に対し、西洋では衿に関心を持つようになった中世後半から立体構成が芽生え、以来その発達に伴い装飾性を求めて、多様な衿の変化形が作られた。即ち、身頃衿つけ線・衿つけ線・衿幅・衿腰・ラベルの各構成要素に、曲線・ダーツ・くせりを施し、その結果、それまでの各構成要素別の大小の変化にとどまらず、曲線による変化を加え、変化形の範囲を著しく広めた。

6-2 衿を立ち衿・折り衿・開き衿の3種類とその複合形として分類することができるならば、この3種類の製図法を確立することにより、すべての衿をこれに適合させることができる。衿の製図法では衿腰に関する研究が多い。これは立体裁断法から平面製図法に移す場合の問題点を暗示している。今後は頸部・肩

部の人体因子を加えての研究を期待したい。

6-3 和服に見る衿の構成要素別変化形は多様である。(表2-平面構成)その上、平面構成であるために限界があると考えられる衿が「抜き衣紋」に着る方法によって、プラス角度からマイナス角度への移行も実現している。「小袖の構造は洗練された1つの極限の着装形式として完成した¹²⁾。とする論について衿の構造とその変化形の面からその具体例を確かめることができた。

6-4 衿の形の変化は、構成要素別変化形の組み合わせに他ならない。従って3種類の基本衿のうち、構成要素の多い衿ほどその変化形も多い。豊かな感性によるデザイン活動や、習熟した技術による立体裁断と共に、この構成要素を理論的に組み合わせるような衿も自由に設計製作することができるようにすることは、被服製作の合理化に寄与し、被服構成の教育上有効な方法と思われる。

7. ま と め

デザインと裁断の関係を明らかにするため、構造のちがいによる衿の分類を試みた。衿は次のように定義した。「別つ裁ちによって作られ、身頃衿つけ線にとりつけられた衣服の部分としての衿をさす」。分類尺度は、構成要素を抽出しこれによって構造のちがいを明らかにした3種の衿である。

- 1) 抽出した構成要素は身頃衿つけ線、衿つけ線、衿幅、衿腰、ラベルの5要素である。
- 2) 衿の種類は立ち衿、折り衿、開き衿の3種であり、構成要素との関係は表1に示した。
- 3) 台衿つきシャツカラーは立ち衿と折り衿の複合形である。現在一般に用いられている衿は、3種の衿とその複合形にすべて分類することができる。(表2参照)
- 4) 3種の衿は各々構成要素別変化が可能である。従って構成要素の多い衿ほど変化形は多く存在する。
- 5) すべての衿が3種の衿とその複合形として分類することができるならば、3種の衿の製図法を確立することにより、どのような衿もこの方法で設計することができる。

稿を終るにあたり、終始御助力をいただきました長井久美子さんに心から御礼申し上げます。本稿の要旨は、日本家政学会第27回総会にて報告しました。

衿の分類

表2 衿の分類

衿の種類	代表形	構成要素別変形									
		身頃衿つけ線	衿つけ線	衿幅			衿腰	ラベル			
立	平面構成	盤丸上垂方垂垂棒	領襟頭領襟頭領襟頭	大阪之助通都三扇	衿衿衿衿衿衿	僧糸雲千笹海狭広	綱瓜井代田鼠	領衿衿衿衿衿衿	平撥衿		
		立ち衿 詰め衿 Stand C. Standing C. Stand-up C. Up-to neck Up-to throat Chinese C. Mandarin C. Military C. Officer C.	Stand away C. Stand off C. Stand offish C. Faraway C. Moat C.	Chin C. Funnel C.	Ruff Piccadilly C. Fan C. Elizabethan C. Medici C. Poke C. Single C. High C. Dog C. Tulip C. Chimney C. Macaroni C. High built-up C. *Tie C.	Tall C. High neck C. Roman C. Johnny C. Jutting C. Collars Collaret Gladstone C. Band C. Belt C. Neck band Collar band					
折	り衿	髪置衿 被布衿 シャツ衿 ステンカラー Roll C. Stand fall C. Polo C. Convertible C. Turn over C. Prussian C. Ring C.	Low C. Side-way C. Asymmetry C. Horseshoe C. Italian C.		Falling band Rouis IX C. Vandyke C. Shakespeare C. Fanon Puritan C. Quaker C. Lie down shape Plain C. Enormous C. Pierrot C. Mousquetaire C. Regency C. Bertha C. Cape C. Danddy C. *Bowed C.	Barrymore C. Giant C. Buster Brown C. Peter Pan C. Peggy C. Choirboy C. Eton C. Little girl C. Stand out C. *Sailor C. Middy C.	Rabatine C. One Piece C. Three way C. Pressman shirts C. Half roll Peter Pan C. Flat C. Half roll C. Poets C. Tunnel C. High roll C. Full-roll C. Turtle neck C. Low turtle C. Fringe C. Dutch C.				
		複合衿 折衿 形衿	ワイシャツ衿 合衿つき Stand and fall C. Turn down C. Storm C.								
開	き衿	開衿 Tailored C. Open C. Sport C.	Tailored C. High closing Medium closing Low closing	背広衿	Notchless C. *Shawl C. Shawl roll C. Notched roll C. *Tuxed C. Tailored shawl C. Petal C. Ulster C. Bal C. Step C. Wide spread C.	Wing C. Robespierre C. Napoleon C. High shawl C. Oblong C.	ちまみ し剣り がり Notched lapel Peaked lapel C. Clover leaf C. Semi clover leaf C. Fish mouth C. Reefer C.				

注 ① 衿の名称は日本語、英語とし、同じ衿の形でも名称の異なるものはすべてあげた。
 ② *印をつけた衿はその構成方法により、立ち衿または折衿、折衿または開き衿となる。
 この例を文中の図5にあげ、比較的多く用いられる方法によって分類した。

表3 デザイン画による衿の分類

衿の種類	代表形	構成要素別変化形				
		身頃衿つけ線	衿つけ線	衿幅	衿腰	ラベル
立衿						
ち衿						
折衿						
複合形 (立ち衿と折り衿)						
開き衿						
上衿の変化		立衿 	立衿 	折衿 	複合形 	上衿なし

衿の分類

引用文献

- 1) たとえば：近藤れん子：立体裁断と基礎知識，180～189，モード・エ・モード社，（1979）
- 2) 江馬 務：被服文化，38，13～15，（1956）
- 3) 杉本正年：風俗，7(1)，1～7，（1967）
- 4) 渋谷裕子：被服文化(78)，70，(図8)，（1962）
- 5) 祖父江茂登子：お茶の水女子大附属高校紀要，No.8，26，（1963）
- 6) 平沢和子：家政学雑誌掲載予定
- 7) 平沢和子：家政学雑誌，34(2)，112～117，（1983）
- 8) 平沢和子：家政学雑誌，34(5)，342～353，（1980）
- 9) 平沢和子：被服の設計・製作に関し優れた技術をもつ専門家の調査，被服構成学研究委員会，1，34～38，（1980）
- 10) 青木伊津子デザイン画：部分デザイン，文化出版局（昭和43年）から主に抜粋
- 11) たとえば，1) 中華人民共和国シルクロード文物（於東京国立博物館）パンフレット，No.40，No.84，男子立備にみる「開き衿」，（1979）
2) Max Tilke：Costume Patterns and Designs，P.78の20～23番，タートル人にみる「開き衿」A. Zwemmer LTD.（1955）
- 12) 祖父江茂登子：被服文化（100），86，（1966）